

津久井やまゆり園事件から
10年の節目に

当事者目線を目指して

中井やまゆり園で見たこと・
感じたこと

羽生 裕子



5年前
人の姿が見えない
園の渡り廊下

津久井やまゆり園事件と私

知的障害・発達障害を持つ子ども・おとなとこれまで30年近くかかわり、
子どもたちが発達し変化する様子や、それに伴う家族の思いの変化を見てきました

<10年前> 津久井やまゆり園事件

大きな衝撃・怒り・恐怖

そして疑問

なぜ、
「生きている意味がない」と
言われなくてはならないのか

加害の思想だけを問うのではなく、
人を取り巻く環境、施設、社会、そして支
援のまなざしを問う

<5年前> 中井やまゆり園との 出会い

津久井やまゆり園事件後の県立施設の
検証で、6施設で、計119件の身体拘束
が明らかに

そのうちのひとつ、中井やまゆり園に
令和4年から関わることに

問い:人の価値を見失う場合は、どのようにつくられるのか。

問い:人の暮らしを取り戻す支援は、どこから始まるのか。

中井やまゆり園 いまの暮らし



園での日中活動で仲間とともに電化製品の解体作業に取り組む



地域の企業と協働し、公園の美化活動に汗を流す



休日に地元の野球チーム、フューチャードリームスの試合観戦

身体拘束はほぼなくなり、人が行きかう施設に
それでも今も“支援”とは何か、を模索し
苦悩している

問い:人の価値を見失う場は、どのようにつくられるのか。
問い:人の暮らしを取り戻す支援は、どこから始まるのか。

問い:人の価値を見失う場合は、どのようにつくられるのか

令和3年（2021年） 中井やまゆり園で見たもの

「刺激」を排除した空間は、暮らしも排除していた



人がいない

寮にも園庭にも人けがなく
本人の姿が見えない



関わらない

何もない部屋で長時間の居室
施設。「刺激しない」ことが
支援の中心に



暮らしがない

封鎖された洗面台、便座のないト
イレ 活動・役割・日々の変化が
少ない生活

「管理側から見た”問題行動”」を起こさないことが目的にすり替わり、暮らしは失われていた
その人の人間性や思い、困りごと、願いは語られていなかった
その中で、新たな“問題行動”が生じ、強度行動障害のレッテルを貼られ続けていた

問い:人の価値を見失う場合は、どのようにつくられるのか

分断は、身体機能や意欲の低下としても現れていた

● 人との分断

かかわらない
刺激しない
小さな変化に気づけない

● 場との分断

園から出ない
地域から離れる
活動と役割がなくなる

● その人の歴史からの分断

過去のエピソードを知らない
いつから今の状態になったかわからない
未来を描けない

56.3%

20年以上在園

長い時間が、暮らしの変化を見えにくくしていた。

24人

車いす利用

うち17人は入所後に車いすとなったと整理されている。

42人

白内障

成熟白内障は7人。医療アクセスをあきらめていなかったか。

58人

食事形態に配慮

低栄養を懸念される人は36人と整理されていた。

歩けなくなる 見えなくなる できていたことができなくなる。
それは本人の問題でなく、暮らしが失われた結果である。

令和8年4月 独立行政法人神奈川県立福祉機構中井やまゆり園 設立



4月
利用者とともに
桜の下を歩く

出発点の転換—「本人の問題」から「暮らしと社会の課題へ」

現状の構造

強度行動障害を「本人の問題」として扱う

入所が「収容・隔離」になり、日々の目的が「問題を起こさない」へ傾く。

そのとき、本人の関係・活動・役割がなくなり、暮らしは痩せていく。

問い：それは本人の困難か、施設と社会の困難か

転換の構造

関係を紡ぎ、修復し、広げる

新たな出会い・活動・役割・居場所をつくる。

「安全に閉じる」ではなく、本人の暮らしが再び広がる条件を整える。

問い：本人の世界を広げるために、何を変えられるか。

福祉科学の起点：暮らし・関係・社会を問い直す

問い:人の暮らしを取り戻す支援は、どこから始まるのか。

当事者目線 | 声なき声が通る条件をつくる

声がないのではない。受け取る側のアンテナを育てる。

- 1 人生史を知る** 生育歴、写真、人となり
- 2 暮らしを共にする** 一緒に活動し、同じ時間を過ごす
- 3 身体の微細な変化を聴く** 表情、息づかい、緊張と弛緩、沈黙、拒否、活動睡眠、食事、排泄、体調の変化、活気
- 4 読み違いを直す** 分かったつもりにならず、反応を受けて訂正する
- 5 関係を広げる** 人、活動、役割、居場所へつなぐ



人生史をまとめた年表を
囲んでカンファレンス

当事者目線は「代弁」ではなく、本人と世界と一緒に読み直す双方向の営み。

問い:人の暮らしを取り戻す支援は、どこから始まるのか。

障害ではなく、困りごとを見る

障害名・問題行動・病名で理解を止めない

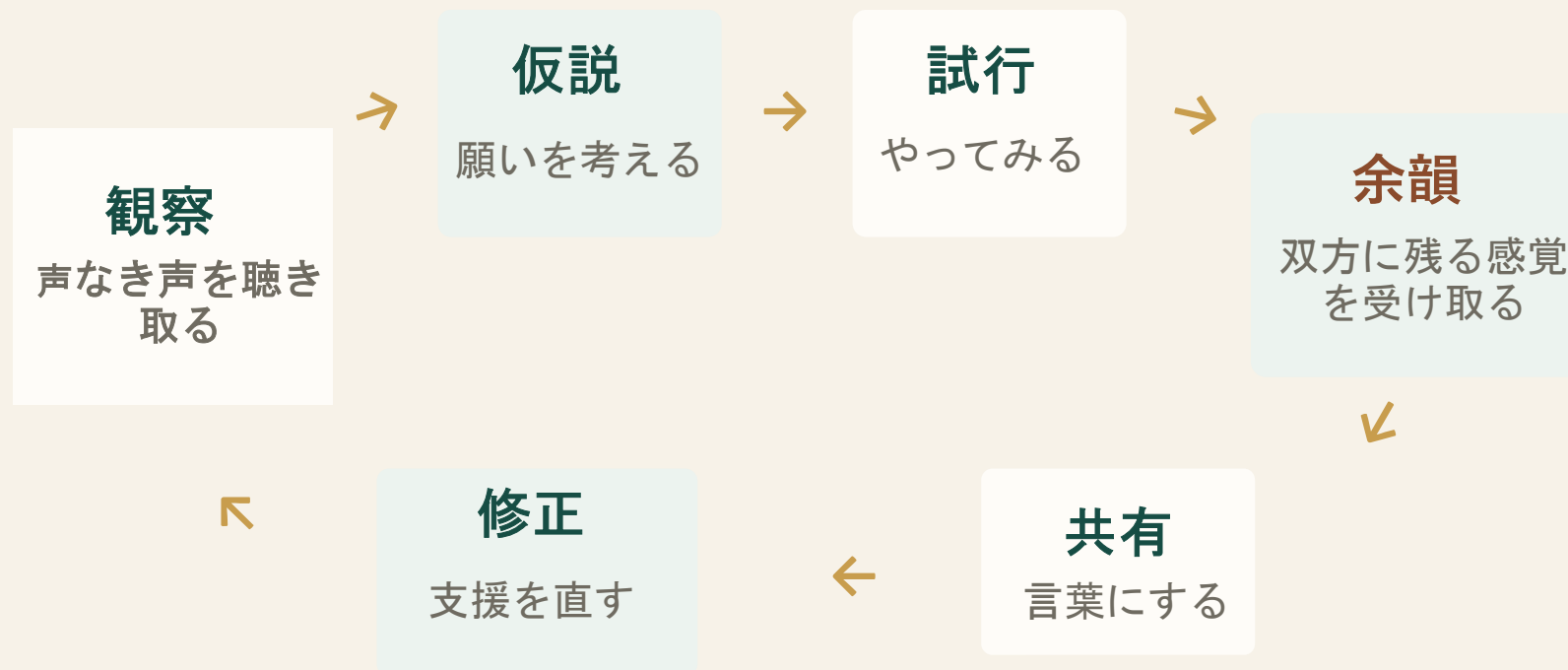


困りごとは、本人の能力の欠如ではなく、
暮らし・身体・関係性（かかわり）・環境・制度の不一致を知らせるサイン。

仮説として支援する ⇒ 福祉を科学する

本人を試すのではなく、支援する側の条件を試し直す

答えを断定し支援を固定化するのではなく仮説を立てて実行し余韻を受け取り修正する



科学は、本人を管理する檻ではなく、支援を直す灯りである。
仮説を立てることが研究であり、やってみることが実験であり、本人は安心したか・次の暮らしにつながったかが成果である

Aさんの看取りが遺した問い

誰と、どのように生きぬきたいかを中心に、場を結び直す



最期の時、たくさんの利用者・職員が寄り添った

問いの転換

場所から始める問い
どこで過ごすか

本人から始める問い
誰と、
どのように

- 固定しない 本人の思いは瞬間ごとに変わる
- 組み替える 人・場所・支援を願いに合わせる。
- 壁を薄くする 支援する側／される側を越えて向き合う。

看取りは、関係が生きていたことの証明
でもあった

あの温かい空気を日々の支援につなげたい

生きた証と福祉の専門性

病気ではなく「症状」をみる 障害ではなく「困りごと」をみる

01 見る視点を変える

本人の「いま」をみる

病名・障害名で理解を止めない

症状 痛み・不眠・便秘・呼吸
・食欲・緊張

表現 表情・視線・姿勢・拒
否・接近／回避

困りごと = 願いと環境
がぶつかる場所

02 関係が響いた最期

60人超

声かけ・涙・歌声
そして

鳴りやまない拍手

「共に生き、支え合った」
時間への感謝と称賛、究極
の生きた証

03 遺された問い

終着点から中継点へ

終着点 → 中継点

関係を閉ざす

つながりを編み直す

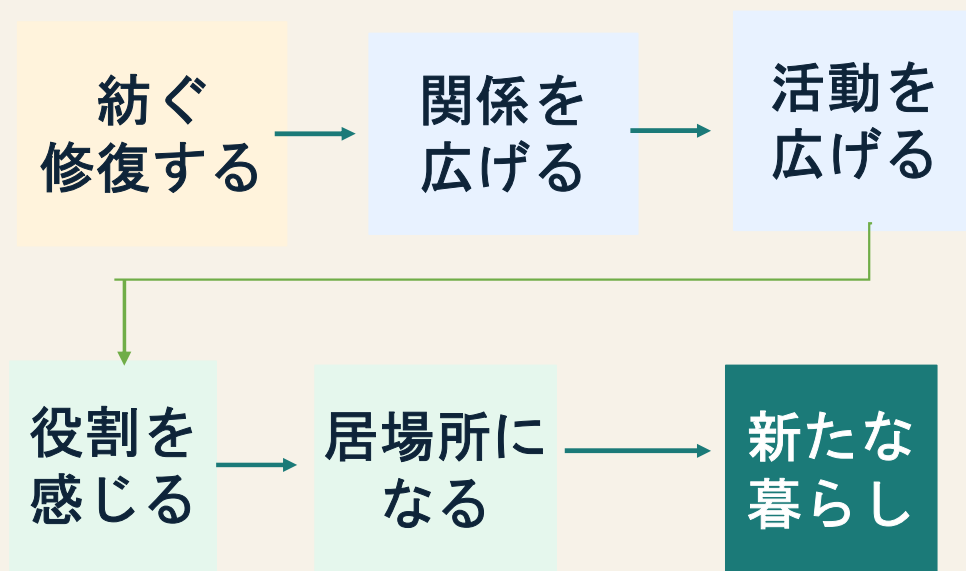
本人を変えるのではなく、
関係・活動・役割・居場
所を広げ、次なる暮らしへ
つなぐ条件を整える。

福祉の
専門性

どんな状態でも関係を築き、困りごとを本人に返さず、
支援・環境・社会を訂正し続ける力

6月 地元：中井町の農家の皆さんとともに麦の収穫

施設は管理の箱やつながりを断ち切る場ではなく、関係性の回復と広がりの方



これからも共に歩んでいきます

